連載

ふるさと Something NEWS

第⑧回

福島、いまは春
――8年後の被災地を訪ねて

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人 efco.jp　代表理事　佐藤 建吉

▼ふるさと大使の会

正式には、「全国ふるさと大使連絡会議」という組織がある。その名の通り、全国の県や市町村、観光協会などが、その地域をPRするため「観光大使」や「親善大使」などと名づけた任命制度がある。鹿児島市ふるさと大使が起源であると聞いている。全国で、809団体、951大使が存在するらしい。

2019年4月6日&7日に、同連絡会議主催の東日本大震災・原発被災地の福島を訪ねる一泊二日のバス旅行に、筆者も参加した。新宿を朝8時過ぎに出発、福島県富岡町を目指すバスには、浅田和幸代表をはじめ18名が乗車した。

▼富岡町の桜祭り

昼過ぎ、双葉郡富岡町に到着した。福島第一原発のあった大熊町から10キロメートル圏の富岡町は、原発事故後町内立ち入り禁止であったが、この日は特別に入場可能なところもある。県道36号線（小野富岡線）を走ると、沿道にあるホームセンターやパチンコ店などは、8年間も放置されていた結果、荒廃の様子が、店舗が大きいため痛々しい。その景色を、今なお見せつけられる。

バス旅行の最初の目的地は、富岡第二中学校近くの富岡町桜まつり会場。ちょうど桜が満開で、同校グランドとそれに面した桜並木通りでは、賑やかによさこい踊りなどが繰り広げられていた。この日ばかりは、町民の多くが参集し、加えて町外の、東京などからの観光客も参加し、8年前の悲劇を忘れたかのようであった。

筆者らも地元の人の手づくりの復興弁当、そして純米吟醸酒「甦る」（よみがえる）を頂き、いつしか同化していた。

▼双葉町いんふぉ

次の訪問先は、双葉町のまちの駅「ふたばいんふぉ」。東日本大震災の当時の様子、復興の軌跡が展示ルームに展示・掲示されている。外部からの応援活動や資料も観て知ることが出来る。私は、ポスターを購入した。それは、新橋の洸楓座の事務所に掲示してある。

案内して下さったのは、復興のため鎌倉から移住して活動している鈴木亮氏。鈴木氏とは、別件で筆者が考える条件についても相談したが、協力して頂けそうで、早速いい出会いができた。

▼東電廃炉資料館

続いて富岡町にある東電廃炉資料館を見学した。2階建ての館内には、福島原発事故を経験して、その反省と解決に向けた展示や説明がされている。初めに2階の映像スペースで、8分間の反省と教訓と題するビデオを観た。

筆者は、2002年3月に、元東電社員のM氏の引率で、福島原発第一発電所（福一）見学に、一泊二日のバス旅行を、千葉市から総勢30名くらいでしたことがある。福一の1号機の炉心上に立ち、管制室内部を見て、また冷却水排水溝も覗いた。まさに、電源喪失事故現場の周辺も見せて頂いた。安全を自認しての公開であったと思われる。

バス旅行の往復時には車内で原発の必要性やメリットについて説明を受けた。帰路に、筆者は地震津波に対する不安について尋ねると、その質問については支社に帰ってからお答えするということであった。詳しいデータは筆者も持ち合わせていなかったが、何か釈然とせず疑義があった。3・11の原発事故後、同道していた卒業生からメールで、「あの時の地震津波の質問が現実になりましたね」、とのメールを受けたことがある。

廃炉資料館の展示では、福一の廃炉のスケジュールについては、示されていないが、30～40年かかると予想されている。

館内に、4月10日からは、双葉町と大熊町の一部では、避難解除となり居住可能になるとの展示があった。やっと、街に人手が入り、息吹が出ることに期待した。実際、翌10日になると、ニュースで帰れた喜びを伝えていたが、地震被害とは異なり、放射能事故は時間が掛かる。

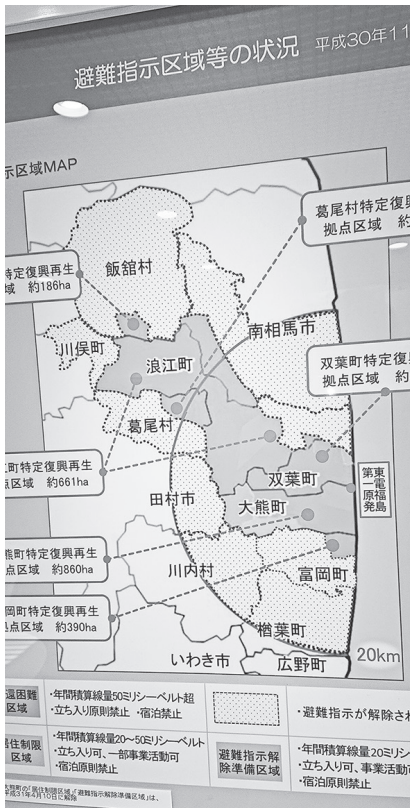
川内小学校前での参加者の一部

▼川内村での交流会

富岡町からバスで暫く走り、宿泊先の川内村に移動、到着した。すぐに、村営温泉施設に移動し、入浴した。そこからは、友人で福島市在住のS氏も合流した。入浴後、川内村村長の遠藤雄幸氏、商工会長井出茂氏、さらに移住して活動している方も参加で、地元料理や酒杯で交流会は賑わった。川内村では、未来のために教育に投資しているとの村長の説明であった。翌日は、宿舎の目と鼻の先にある川内小学校に出かけ、村長の想いの丈を知った。

川内村は、福一から20キロメートル圏ではあるが、風向がそれ放射能被害は浪江町などに比べると少なかったようであるが、地元民の意気込みで、復興に加速している様子を知れた。

▼福島の求めるもの

筆者は、相馬高校のSSHの活動での理科実験指導を端緒として、福島県には何度も訪ねた。被災後も訪ねたが、今回のバス旅行は、三春町の枝垂れ桜、栃木市の桜街道を経由して帰京した。桜花爛漫は、一年の一時（いっとき）のプレゼントであるが、福島が求めるのは、一年継続する復興の現実である。第二の福島をつくってはならない。

原発避難区域のマップ